

一期生の春期ホームカミングデーを開催しました！

教職大学院では、今年3月に初めての修了生を送り出しました。修了生は、4月から様々な形で、学校や行政の現場で仕事をしています。そこで、GW期間の5月3日午後、宇都宮大学において、修了生が近況を語り合う機会を持ちました。当日は9名の修了生が集まり、教員や現院生と一緒に、情報を交換し、懇談を行いました。

◆修了生が語ったこと

修了生には、以下のような共通の課題を示し、発表をして頂きました。

「あなたにとって、教職大学院における2年間の学びは、どのような意味をもったのか。宇都宮大学教職大学院が掲げる『学校改革力』『授業力』『個への対応力』という3つの力と関連づけて、述べてほしい。」

以下は、修了生の発表内容の一部の要約です。



○現職修了生A氏(教諭)

子どもの見え方や授業観が変わったと感ずることがあります。従来は、1回の授業の内容をどう効果的に伝えるかに力点を置いていましたが、今はそれに留まらず、子ども達の課題解決を自然な形で次につなげる、発展させることが大切と考え、1回の授業ではなく、より中長期の視点で全体的な子ども達の学びを見ていくようにすることが出来ています。教職大学院で「授業力」を身に付けたからこそ、自信をもってこうした判断ができていますと思います。

○現職修了生B氏(教諭, 学習指導主任・初任者指導)

学校では、教員の多様な価値に柔軟に対応することができていると感じます。生徒の学びを中心に据え、同僚性のあるチームとして動けるように人間関係を構築中ですが、ここでは大学院での教育実践プロジェクトにおける経験が大変役に立っています(学校改革力)。

初任者指導主任としては、若手教員の困り感に寄り添うことができているように感じ、これには学卒院生との日々が活きていると思っています。

○学卒修了生C氏(教諭)

クラスに在籍している落ち着きのない子どもに対して、その子の理解を多面的にしようと考え、余裕を持ちながら対応ができています。これは教職大学院で「個への見とり」を意識して学んだからと考えます。

着任後、自分の担当クラスだけが騒がしい気がして悩ん

だことがありました。そのとき、修了生と話し合う機会があり、自分が焦っていたことに気付きました。このように、多忙で経験も少ない中で立ち止まって考えることができているのは、教職大学院での学びや修了生間のネットワークのおかげだと思います。

○現職修了生D氏(指導主事)

現在、幅広い仕事を担当していますが、それに対応できているのは、教職大学院での多様な学びが活きています。また、多種多様な人と協力しながらチームとして働くことに抵抗無く入っていけるのも、教職大学院での学びが大いに役立っています。さらに、課題を自分で見つけて、自分で解決していく力や癖(習性)が身についたと思っています。新しい職場でも同僚と連携を図りながら、仕事を進めていきたいです。

○現職修了生E氏(学力向上推進リーダー)

現在、4校に関わっています。各校における活動は多様ですが、こちらが実践を牽引するというのではなく、先生方と一緒にやるという感覚を持つことができています。これには教育実践プロジェクトでの経験が活きています。

◆教職大学院における学びが今どう活きているか

このように、3つの力の1つ1つ、そして、それらのつながりを学んだことが、現場での多種多様な問題の解決に実際に役立っていることが繰り返し語られました。

また、多様な人と共に歩む関係を構築すること、動きながら課題を見出し解決していくこと、いろいろな見方があることをむしろ楽しむこと等、教育実践プロジェクトに従事することで身につけてきた知恵や姿勢、感覚についても語られました。



修了後も、修了生間でのネットワークが活きているようです。修了生の更なる活躍を期待したいです。

(文責: 日野圭子)

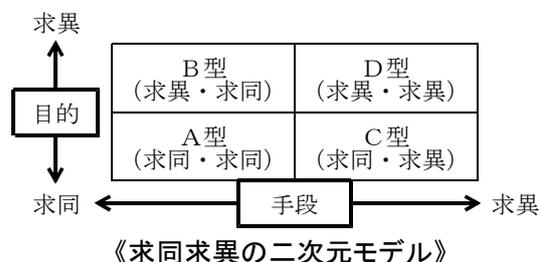
「求同求異の授業デザイン」

教育実践高度化専攻教授 渡辺 浩行

求同求異とは、同じものを求め異なるものも求めるという発想です。北尾『学習指導の心理学教
え方の理論と実践』有斐閣)によれば、求同(きゅうどう)はすべての子どもを同じ学習レベルまで
近づけようとする考えで、求異(きゅうい)は一人ひとりの質的な学力の違いをさらに大きくしよう
とする考です。求同は量的な学力の均等化をねらい、求異は質的な学力の個性化をねらいます。

この発想のもとで、北尾は、下図の学習の目的と手段の二次元を提唱しています。A型は学習の目
的も手段も同じで、B型は目的が異なり手段が同じです。C型は目的が同じで手段が異なり、D型は
目的も手段も異なります。

求同求異の考え方は人間心理によくかなっています。人は相手と同じで安心し、異なることで不
安になります。また、相手と同じでがっかりし、異なることで喜びます。つまり、同じことを求め
ながら異なることも求めるわけです。そこに分かち合う必要や楽しさが生まれのですから、求同求
異は排他的な関係ではなく、相互補完の関係になるのです。授業をデザインするとき、特に「分か
ち合い」を意図するとき、この求同求異はなくてはならない考え方になると言えるでしょう。



《シリーズ:教職大学院授業紹介②》「学級経営の実践と課題」(共通科目[前期])

「学級経営の実践と課題」では、受講者自身が学級
経営上の諸問題を出し合い、出された問題のいくつか
をグループで協議し、協議結果をさらに全員で検討し
ています。そして、問題への視点、解決方法を探っ
ています。検討の際には、歴史的背景、全国的な状況・
現状等にも留意し、客観的に問題を把握するように心
がけてもらっています。

教員は、近藤秀人先生と丸山が担当しています。実
践的な問題は近藤先生が、歴史的背景や理論的な問
題を丸山が担当し、受講者にも諸問題を、実践と理論
の両側面から考えてもらっています。「各自の経験によ
りかからないように」を大切にしています。

受講者の疑問や関心は尽きません。「学級がうまく
機能するためにはどのように学級づくりをしたらよ
いか」、「生活班を生かすにはどうしたらよいか」、「学
級担任として保護者との関わりはどのようにしたらよ
いか」、「(学級崩壊)振り返ると嵐のようなほうかいであ
ったが、何をもって崩壊が始まり、何をもって収束したの
か、今でも分からずにいる」、「教室がどのように整備さ



れているかによって、教室で学習し生活する児童生徒
の情緒の安定に影響を与える。教室環境はどのように
整えたらよいか」、「人間関係に悩みを抱えている生徒
が多い。望ましい人間関係を構築する能力を育成する
方法を考えていきたい」等々。

授業も3年目に入り、授業の進め方も安定してきま
した。特に今年の授業は、受講者中心で授業が進み、
大学教員は授業の最後に質問、コメントするだけで
す。

圧巻は、「保護者との関係」をテーマに発表してもら
ったときでした。発表グループが、「学校と保護者の関
係」、「現在のクレーム問題の背景」、「保護者の苦情
への対応の仕方」、「保護者対応の心がけ」、「苦情
を鍛える校内研修」について説明した後、グループご
とに保護者対応に関するロールプレイを行いました。
保護者役に嵌った人、担任役で大いに戸惑った人、さ
まざまでした。その後、受講者全員が感想を述べたの
ですが、このときは笑いに包まれ、大いに盛り上がりま
した。機会があれば、一度ご参加ください。

(担当代表:丸山剛史)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。